

Riemann 幾何学と統計多様体の間の関係

mico

2025 年 7 月 30 日

定義 1: 統計多様体

(M, g) を Riemann 多様体とする. M 上の捩れを持たないアファイン接続 ∇ が Codazzi 方程式

$$(\nabla_X g)(Y, Z) = (\nabla_Y g)(X, Z) \quad (\forall X, Y, Z \in \Gamma(TM))$$

を満たすとき, (∇, g) を M 上の統計構造といい, (M, ∇, g) を統計多様体という.

定義 2: 双対接続

M, g を Riemann 多様体, ∇ を M のアファイン接続とする. このとき等式

$$Xg(Y, Z) = g(\nabla_X Y, Z) + g(Y, \nabla_X^* Z) \quad (\forall X, Y, Z \in \Gamma(TM))$$

が成り立つような M 上のアファイン接続 ∇^* を一意に定めることができる. このアファイン接続 ∇^* を ∇ の双対接続という.

いくつかの性質を確認しておく.

命題 1

(M, ∇, g) を統計多様体とする. このとき (M, ∇^*, g) も統計多様体となる. この意味で統計多様体を (M, ∇, ∇^*, g) と記述する.

命題 2

∇^* の双対接続 $(\nabla^*)^*$ は ∇ に等しい.

命題 3

Riemann 多様体 (M, g) の Levi-Civita 接続を ∇^g と書くこととする. このとき (M, ∇^g, g) は統計多様体で, $(\nabla^g)^* = \nabla^g$ が成立する.

命題 4

(M, ∇, ∇^*, g) が統計多様体ならば, $\nabla^g = \frac{\nabla + \nabla^*}{2}$ が成立する.

命題 5

$(\widetilde{M}, \widetilde{\nabla}, \widetilde{\nabla}^*, h)$ を統計多様体, M を多様体, $f : M \rightarrow \widetilde{M}$ をはめ込みとする. このとき, 直和分解 $f_*TM \oplus N_fM$ に沿って, $X, Y \in \Gamma(TM)$ に対して $\nabla_X Y, \nabla_X^* Y \in \Gamma(TM), \alpha(X, Y), \alpha^*(X, Y) \in \Gamma(N_fM)$ を

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_X Y &= f_* \nabla_X Y + \alpha(X, Y), \\ \widetilde{\nabla}_X^* Y &= f_* \nabla_X^* Y + \alpha^*(X, Y)\end{aligned}$$

を満たすようにそれぞれ定める. このとき ∇, ∇^* はともに M 上のアファイン接続で, $\alpha, \alpha^* \in \Gamma(TM^{(0,2)} \otimes N_fM)$ で, なおかつそれぞれ対称である.

Proof. $\phi : M \rightarrow \mathbb{R}$ とする. このとき,

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_{\phi X} Y &= \phi \widetilde{\nabla}_X Y \\ &= \phi(f_* \nabla_X Y + \alpha(X, Y)) \\ &= f_*(\phi \nabla_X Y) + \phi \alpha(X, Y)\end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned}\nabla_{\phi X} Y &= \phi \nabla_X Y, \\ \alpha(\phi X, Y) &= \phi \alpha(X, Y)\end{aligned}$$

である. また,

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_X \phi Y &= X(\phi) f_* Y + \phi \widetilde{\nabla}_X Y \\ &= f_*(X(\phi) Y) + \phi(f_* \nabla_X Y + \alpha(X, Y)) \\ &= f_*(X(\phi) Y) + \phi \nabla_X Y + \phi \alpha(X, Y)\end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned}\nabla_X \phi Y &= X(\phi) Y + \phi \nabla_X Y, \\ \alpha(X, \phi Y) &= \phi \alpha(X, Y)\end{aligned}$$

である. 以上より確かに ∇ は M 上のアファイン接続で, $\alpha \in \Gamma(TM^{(0,2)} \otimes N_fM)$ である. (和についての準同型であることについては省略した.) また, $\forall \xi \in \Gamma(N_fM)$ について,

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_X Y - \widetilde{\nabla}_Y X &= T\widetilde{\nabla}(X, Y) + [f_* X, f_* Y] \\ &= f_*[X, Y]\end{aligned}$$

なので, $\alpha(X, Y) = \alpha(Y, X)$ である. ∇^*, α^* については同様なので省略する. □

命題 6

上の命題で定めた ∇, ∇^* は M 上の計量 $g := f^*h$ についての双対接続となる。また, (M, ∇, ∇^*, g) は統計多様体となる。

Proof. まず, ∇, ∇^* が g に関する双対接続であることを示す。[追記予定]

$$\begin{aligned} g(\nabla_X Y, Z) + g(Y, \nabla_X^* Z) &= h(f_* \nabla_X Y, f_* Z) + h(f_* Y, f_* \nabla_X^* Z) \\ &= h(\tilde{\nabla}_X Y - \alpha(X, Y), f_* Z) + h(f_* Y, \tilde{\nabla}_X^* Z - \alpha^*(X, Z)) \\ &= h(\tilde{\nabla}_X Y, f_* Z) + h(f_* Y, \tilde{\nabla}_X^* Z) \\ &= (f_* X)h(f_* Y, f_* Z) \\ &= Xg(Y, Z). \end{aligned}$$

よって確かに双対接続となっている。

次に, $T^\nabla = 0$ であることを示す。

$$\begin{aligned} f_* T^\nabla(X, Y) &= f_*(\nabla_X Y - \nabla_Y X - [X, Y]) \\ &= \tilde{\nabla}_X Y - \alpha(X, Y) - \tilde{\nabla}_Y X - \alpha(Y, X) - f_*[X, Y] \\ &= T^\nabla(f_* X, f_* Y) \\ &= 0. \end{aligned}$$

よって $T^\nabla = 0$ である。

最後に, $(\nabla_X g)(Y, Z) = (\nabla_Y g)(X, Z)$ であることを示す。

$$\begin{aligned} f_*(\nabla_X g)(Y, Z) &= f_*(Xg(Y, Z) - g(\nabla_X Y, Z) - g(Y, \nabla_X Z)) \\ &= (f_* X)h(f_* Y, f_* Z) - h(f_* \nabla_X Y, f_* Z) - h(f_* Y, f_* \nabla_X Z) \\ &= (f_* X)h(f_* Y, f_* Z) - h(f_* \tilde{\nabla}_X Y, f_* Z) - h(f_* Y, \tilde{\nabla}_X Z) \\ &= (\tilde{\nabla}_X g)(Y, Z) \end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned} f_*(\nabla_X g)(Y, Z) &= (\tilde{\nabla}_X g)(Y, Z) = (\tilde{\nabla}_Y g)(X, Z) = f_*(\nabla_Y g)(X, Z), \\ (\nabla_X g)(Y, Z) &= (\nabla_Y g)(X, Z). \end{aligned}$$

□

以上の議論から, 統計多様体とそこの中へのはめ込みが与えられれば, それは部分的な統計構造を持つことがわかる。以降, 部分統計構造 $f : (M, \nabla, \nabla^*, g) \rightarrow (\tilde{M}, \tilde{\nabla}, \tilde{\nabla}^*, h)$ を中心に考察を行う。

命題 7

通常の等長はめ込み $f : (M, g) \rightarrow (\tilde{M}, h)$ における Gauss の公式を

$$\nabla_X^h Y = f_* \nabla_X^g Y + \alpha^0(X, Y)$$

とする. このとき $\alpha^0 = \frac{\alpha + \alpha^*}{2}$ が成立する.

命題 8

等長はめ込み $f : (M, g) \rightarrow (\widetilde{M}, h)$ が minimal, すなわち $\alpha^0 = 0$ であることと, $\alpha^* = -\alpha$ であることは同値.

命題 9

先ほどと同様に, 分解 $f_*TM \oplus N_fM$ に沿って, $X \in \Gamma(TM), \xi \in \Gamma(N_fM)$ に対して $A_\xi X, A_\xi^* X \in \Gamma(TM), \nabla_X^\perp \xi, \nabla_X^{\perp*} \xi \in \Gamma(N_fM)$ を

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_X \xi &= -f_* A_\xi X + \nabla_X^\perp \xi, \\ \widetilde{\nabla}_X^* \xi &= -f_* A_\xi^* X + \nabla_X^{\perp*} \xi\end{aligned}$$

を満たすようにそれぞれ定める. このとき $A_\xi, A_\xi^* \in \Gamma(TM^{(1,1)})$ で, $\nabla^\perp, \nabla^{\perp*}$ は N_fM の接続である.

Proof. $\phi : M \rightarrow \mathbb{R}$ とする. このとき,

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_{\phi X} \xi &= \phi \widetilde{\nabla}_X \xi \\ &= \phi(-f_* A_\xi X + \nabla_X^\perp \xi) \\ &= -f_*(\phi A_\xi X) + \phi \nabla_X^\perp \xi\end{aligned}$$

なので,

$$\begin{aligned}A_\xi(\phi X) &= \phi A_\xi X, \\ \nabla_{\phi X}^\perp \xi &= \phi \nabla_X^\perp \xi\end{aligned}$$

である. また,

$$\begin{aligned}\widetilde{\nabla}_X \phi \xi &= X(\phi) \xi + \phi \widetilde{\nabla}_X \xi \\ &= \phi(-f_* A_\xi X + \nabla_X^\perp \xi) + X(\phi) \xi \\ &= -f_*(\phi A_\xi X) + X(\phi) \xi + \phi \nabla_X^\perp \xi\end{aligned}$$

なので,

$$\nabla_X^\perp \phi \xi = X(\phi) \xi + \phi \nabla_X^\perp \xi$$

である. 以上より確かに ∇^\perp は N_fM の接続で, $A_\xi \in \Gamma(TM^{(1,1)})$ である. (和についての準同型であることは省略した.) $\nabla^{\perp*}, A_\xi^*$ については同様なので省略する. \square

命題 10

通常の等長はめ込み $f : (M, g) \rightarrow (\widetilde{M}, h)$ における Weingarten の公式を

$$\nabla_X^h \xi = -f_* A_\xi^0 X + \nabla_X^{\perp 0} \xi$$

とする. このとき $A_\xi^0 = \frac{A_\xi + A_\xi^*}{2}$, $\nabla^{\perp 0} = \frac{\nabla^\perp + \nabla^{\perp*}}{2}$ が成立する.

命題 11

任意の $X, Y \in \Gamma(TM)$, $\xi \in \Gamma(N_f M)$ について,

$$g(A_\xi X, Y) = h(\alpha^*(X, Y), \xi)$$

$$g(A_\xi^* X, Y) = h(\alpha(X, Y), \xi)$$

が成立する. また, A_ξ, A_ξ^* は M の計量 g について対称, すなわち

$$g(A_\xi X, Y) = g(X, A_\xi Y),$$

$$g(A_\xi^* X, Y) = g(X, A_\xi^* Y)$$

が成立する.

Proof. $h(f_* Y, \widetilde{\nabla}_X \xi)$ を計算すると,

$$\begin{aligned} h(f_* Y, \widetilde{\nabla}_X \xi) &= (f_* X)h(f_* Y, \xi) - h(\widetilde{\nabla}_X^* Y, \xi) \\ &= -h(f_* \nabla_X^* Y, \xi) \\ &= -h(\alpha^*(X, Y), \xi) \end{aligned}$$

となることがわかる. また,

$$\begin{aligned} h(f_* Y, \widetilde{\nabla}_X \xi) &= h(f_* Y, -f_* A_\xi X + \nabla_X^\perp \xi) \\ &= -g(Y, A_\xi X) \end{aligned}$$

でもある. よって,

$$g(A_\xi X, Y) = h(\alpha^*(X, Y), \xi)$$

であることがわかる. また, これより

$$g(A_\xi X, Y) = h(\alpha^*(X, Y), \xi) = h(\alpha^*(Y, X), \xi) = g(A_\xi Y, X)$$

となることもわかる. よって A_ξ は対称. A_ξ^* については同様なので省略する. □

参考文献

[1] 藤原彰夫, 情報幾何学の基礎 情報の内的構造をとらえる新たな地平, 共立出版, 2021.

[2] 佐藤直飛, 双曲空間上の統計構造とその部分多様体